［別紙２］

審査の結果の要旨

氏　名　　三條　真紀子

本論文は、終末期がん患者を介護する家族へのよりよい支援を検討する目的で、専門的緩和ケアサービスを利用したがん患者の遺族に対し自記式郵送質問紙調査をおこなった。本研究において、介護経験の評価とその関連要因を検討し、緩和ケア病棟への入院を検討する時期の家族への望ましい情報提供とケアのあり方を検討することで、以下の知見を得ている。

1. 終末期がん患者の家族の介護経験を、負担感・肯定感の両側面から評価する尺度を開発した。
2. 緩和ケア病棟もしくは在宅緩和ケア施設を利用して専門的緩和ケアサービスを受けた対象者の60-90％が介護肯定感を有していた。また、介護肯定感の中では、統制感の獲得が最も難しいことが示唆された。
3. その一方で、対象者の30-60%が負担を感じ、なかでも精神的な負担を感じていた対象者は60%と多かった。
4. 介護肯定感、介護負担感ともに、実際に受けた専門的緩和ケアサービスに対する評価の影響はほとんどなく、家族が介護肯定感を獲得し、介護負担感を軽減するためには、その目的に特化した介入が必要である可能性が示唆された。
5. 緩和ケア病棟を利用した遺族の半数は、入院検討時に緩和ケア病棟について得た情報量は十分であり、医師からの説明時期についても適切であると評価した。
6. 情報量が不十分という評価の関連要因は、緩和ケア病棟を利用したことのない患者や家族から情報を得たこと、緩和ケア病棟での医師の数や診察頻度を知らなかったことであった。説明時期が遅かったという評価の関連要因は、医師の説明が患者や家族が今後の選択肢について質問して初めて行なわれたこと、入院検討時に考える時間の余裕がなかったこと、緩和ケア病棟入院の待機期間の見通しがたたなかったことが関連していた。医療スタッフの配置も含めた正確な情報提供と、早期からの病気に関する医師－患者、家族間での話し合いや、緩和ケア病棟の待機期間に関する説明が必要であることが示唆された。
7. 緩和ケア病棟を利用した遺族の 41％は、緩和ケア病棟への入院を検討することがつらかったと回答した。入院を検討する時期の家族のつらさの内容として、「治療を続けたかった」「慣れた環境で過ごしたかった」「患者に希望をもたせたかった」「気持ちが

ついていかなかった」「見放されたと感じた」という気持ちが抽出され、見放されたと感じた気持ちは、入院検討時の全般的なつらさと最も強く関連していた。

8. 入院検討時のつらさには、考える時間の余裕がなかったことと、入院検討時に得た情報が不十分であったと評価することが関連しており、医師からの説明後に、家族が十分に考えて決断することができる時間を確保すること、緩和ケア病棟に関する情報を十分に提供することが推奨された。

以上、本論文では、終末期がん患者の介護者の介護負担感、介護肯定感をわが国ではじめて明らかにし、また緩和ケア病棟利用検討時の家族への望ましい情報提供およびケアに関する示唆を得た。よって、本論文は、終末期がん患者の家族ケアに重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。